シテ是々此かみを見さしませ、これはそなたの女房衆の、また是はわごりよのお内義のじや、おぼへはないか、

〔狂言記五〕かつこ、ほうろく、

わさなべはあおぬしわきへよつてあきなへ　かつこじつしやう、のかぬか、のかざのかすろが、わさなへして、そちがなんとせうとおもふて、かつこやこゝなやつは、であへ〳〵、目代是はなんとした事ぢや　かつこ御前はどなたで御ざりまするぞ

〔物類稱呼言語五〕他をさしていふ詞に、畿内にて吾身といふ、東國にておのし、又おぬし、又そなたなど云、參河にておのさと云、是おのさまの略語なり豐前豐後邊にてわごりよといふ、畿内及出雲若狹邊にてわごれと云、太平記に、和殿と有、これらの轉語歟、上總にてにし、下總にていし、と云、奥州津輕にてうがといふ、又畿内にておどれといひ、對馬にてあやつ、こやつ、又そやつなどゝ云詞は、人を罵る心成べし、略○中又源氏にすやつ、枕草子にかやつ、宇治拾遺にくやつなど有は、今いふきやつと云に似たり、又そいつと云は其奴なり、或はそなたはこなたに對していえる詞也、神代口決に、汝不忘之と有、和歌には汝と詠せり、これらのことばのたぐひ、かぞふるにいとまあらず、又中品已上の言語は、萬國かはる事なきか、こゝに略す、

〔源平盛衰記三十五〕高綱渡宇治河事

源太颯ト打入テ、遙ニ先立ケリ、高綱云ケルハ、如何ニ源太殿、御邊ト高綱ト外人ニナケレバ角申、殿ノ馬ノ腹帶ハ、以外ニ窕テ見物哉、略○中ト云ケレバ、略○下

〔古事記中神武〕爾大伴連等之祖道臣命、久米直等之祖大久米命二人、召兄宇迦斯罵詈云、伊賀此二字以音所作仕奉於大殿内者、意禮此二字以音先入明白其將爲仕奉之狀而、略○下

〔古事記傳十九〕伊賀、此は他に例もなく、甚心得がたき言なるを、試に强ていはゞ、伊賀國風土記